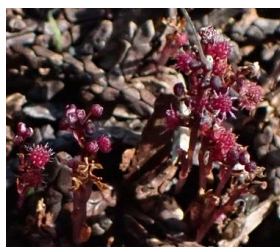


いもう 葦毛通信



ホンゴウソウ

令和2年12月2日
豊橋市文化財センター
豊橋市松葉町3丁目1
TEL: 0532-56-6060

No. 103

1、2020 モニタリング報告ー4

1) J地点・J地点西側

J地点と隣接するJ地点西側は葦毛通信 No. 84 で伐採後1年目と抜根後1年目の状況を報告しました。右上写真のように抜根後1年目(2019年)は発芽した植物はまばらでしたが、2年目(右下写真)の今年は、奥の林縁部からヤマザクラの少し奥側にかけて水分が多く湿地に戻ると予想していたところが一面のイヌノハナヒゲの群落になりました。

林縁部にわずかに残っていた湿地ではアブラガヤやヌマガヤ、ミズギボウシ等が見られました。

J地点南西端でも1年目は出現した植物はまばらでした(下左写真)が、2年目は写真を撮影した時期が遅くかなり枯れた状態ですが、イヌノハナヒゲが広い範囲で出現し、ヌマガヤ等の湿生植物が発芽し良好な湿地に戻りつつあります。

水分の多いところで2年目に湿生植物の発芽が多い傾向は葦毛湿原の他の地点でも見られます。



J地点北側抜根後1年目(2019年8月15日)



J地点北側抜根後2年目(2020年8月18日)



J地点南側抜根後1年目(2019年6月29日)



J地点南側抜根後2年目(2020年10月27日)

木道沿いに設置した J-10～12 実験区（葦毛通信 No. 96 参照）のうち南側の J-10 実験区では愛知県絶滅危惧ⅠA類のカガシラが 11 個体出現しました。カガシラは 2012 年に地上絶滅し葦毛湿原から一旦消えましたが、2014 年に復活し順調に増えています。周囲に植物が少ない裸地状態が保たれているところでは一定期間継続して発芽しますが、周りの植物の生長が早いと 2～3 年で発芽しなくなってしまうところも見られました。大規模植生回復作業を行って裸地化したところでこれまで自生が確認できていなかったところから何か



J-10 実験区のカガシラ (2020 年 8 月 18 日)

所もカガシラが出現しましたが、日照が十分に確保されていないと存続できないようです。

ミカワシンジュガヤも同じような出現の傾向を示していますが、このような裸地化したところに出現してもすぐに他の植物に負けてしまう植物は多くの種子を生産し、種子はすぐに長期間の休眠に入っているようです。



T・U地点抜根後 1 年目 (2019 年 7 月 14 日)

2) T・U地点（二の沢湿地）

二の沢湿地は 2015 年度に木の伐採を 2018 年度に抜根を行い葦毛通信 No. 89 に経過を報告しました。この時示した抜根後 1 年目の写真の日付が間違っており、2019 年 6 月 28 日のものでした。今回、同じ 2019 年に撮影した反対側の上流部から撮影した写真を掲載しました（右上写真）。

抜根後 1 年目は植物の発芽はまばらでしたが、2 年目（右下写真）ではかなり増えてきました。画面に映っている部分は水分が少なく草地になると予想している部分です。このような環境は外来種に適した環境のようで、メリケンカルカヤ、ダンドボロギク、ベニバナボロギク等が多く出現しています。月 1 回の定期作業で除去していますが、十分に手が回りません。



T・U地点抜根後 2 年目 (2020 年 6 月 22 日)

3) O地点

O地点は伐採と抜根作業直後の状況を葦毛通信 No. 63 で、抜根後1年目の状況を葦毛通信 No. 70 で、抜根後2年目の状況を葦毛通信 No. 84 で報告しました。

今年は抜根後3年目になります。2年目にはイヌノハナヒゲが優勢になったと報告しましたが、今年はさらにイヌノハナヒゲが増え、各個体も大きくなったようです。トウカイコモウセンゴケは周辺部の日照がある程度あるところでは開花が見られます。イヌノハナヒゲ群落の中は十分に観察できませんが、少なくなっているようです。

今年は画面手前の部分でイヌノハナヒゲを刈り取るだけのところと根まで除去する二つの実験区を設置するつもりです。何も手を付けないところと比較して発芽する植物に違いがあるのかを確認するつもりです。

イヌノハナヒゲは植生回復作業を行ったところのうち水分の多い所ですぐに大きな群落を形成します。シラタマホシクサのようにイヌ

ノハナヒゲ群落の中に侵出しようとする種もありますが、そのスピードは遅いようです。植物の多様性という点では、イヌノハナヒゲだけでなく、他の植物も進出しやすい環境がどのようなものかを確認するための実験です。

少なくとも江戸時代以来、葦毛湿原は秣場として管理されてきました。イヌノハナヒゲも牛馬の餌として大量に刈り取られていた可能性があります。今回の実験は里山で行っていた作業を復元して、その影響を調べるという目的もあります。



O地点抜根後2年目（2019年9月11日）



O地点抜根後3年目（2020年8月18日）

2. ホソバリンドウとウメバチソウ

葦毛湿原ではホソバリンドウやウメバチソウが終わり、花の季節も終了を迎えました。ホソバリンドウやウメバチソウは葦毛湿原では絶滅寸前の状態です。植生回復作業を行ったところから予想しなかった植物が出現し、埋土種子が長期間に亘って保存されていると考えられる種がある一方で、ミカワシオガマのように全く復活しない種もあります。ホソバリンドウやウメバチソウは埋土種子からの復活が期待できない種なのかもしれません。

1) ホソバリンドウ

ホソバリンドウはI地点東側では新たに発芽した個体がわずかに見られ、若干分布が広がっているようです。新たにI地点西側で2個体2花、G地点で1個体1花の発芽・開花



ホソバリンドウ（2020年11月17日）

コマルハナバチ？

がありました。しかし、H地点やG地点南側では、これまで見られていた個体が発芽しなくなり、消えてしまいました。ホソバリンドウは各地点でわずかに増減を繰り返し、全体としては何とか現状維持をしている状態です。

葦毛通信 No. 61 でホソバリンドウのポリネーターがコハナバチの仲間であることを報告しましたが、11月17日にコマルハナバチ（クロマルハナバチか？）が吸蜜に来ているのを確認しました。I・N地点で木道を挟んで近接して多く開花しているところですが、あちこちの花で吸蜜していました。完全に閉じている花にも無理やり潜り込んでいましたが、蜜や花粉があるのか疑問に思いました。この他にコハナバチも来ていましたが吸蜜しているところは確認できませんでした。

ホソバリンドウの人工授粉は、残念ながら今年度は4回（11月10・13・15・17日）しか行えませんでした。10月25日に開花を確認しましたが、ホソバリンドウは地点ごとで開花期がずれており、さらに今年は各個体の開花期間が短く、受粉シーズンの前半を逃してしまったようです。

2) ウメバチソウ

ウメバチソウはG地点東側でかつては60花ほど咲いていましたが、イノシシにかく乱され開花しなくなっていました。2019年3月17日にテグスで四重に囲って経過を観察していますが、まだ開花していません。今年度の植生回復作業で一部のヌマガヤを刈り取って日照を良くする小規模な実験を行うつもりです。

今年度指定地内で開花を確認できたウメバチソウは1花だけでした。残念ながらウメバチソウは葦毛湿原では絶滅寸前の状態です。



ウメバチソウ（2020年11月10日）